TADOKU JUNIOR やさしい名作リーダー ★★★★☆ ながい 1172語

How Thor Got the Hammer

トールがハンマーを手に入れたわけ

E. Louise Smythe（1904年の本） 原文そのまま 朗読：Sarah Jennings、Abby

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ いたずら者のロキが、トールのおくさんシフの金色のかみを切ってしまいました。ロキは地面の下のこびとたちのところへ。そこで始まったのは、ふしぎな道具づくりの勝負！

Sif was Thor's wife.

Sif had long golden hair. Thor was very proud of Sif's golden hair.

Thor was always going on long journeys. One day he went off and left Sif alone. She went out on the porch and fell asleep.

Loki came along. He was always playing tricks.

He saw Sif lying asleep. He said, "I am going to cut off her hair."



So Loki went up on the porch and cut off Sif's golden hair.

When Sif woke up and saw that her hair was gone, she cried and cried. Then she ran to hide. She did not want Thor to see her.

When Thor came home, he could not find Sif.

"Sif! Sif!" he called, "Where are you?"

But Sif did not answer.

Thor looked all around the house. At last he found her crying.



"Oh, Thor, look, all my hair is gone! Somebody has cut it off. It was a man. He ran away with it."

Then Thor was very angry. He said, "I know it was Loki. He is always getting into mischief. Just wait until I get him!"

And Thor went out to find Loki. Pretty soon he found him.

Thor said, "Did you cut off Sif's hair?" Loki said, "Yes, I did."

"Then you must pay for cutting off my wife's hair," said Thor.



"All right," said Loki, "I will get you something better than the hair."

Loki went down, down into the ground to the home of the dwarfs. It was very dark down there. The only light came from the dwarfs' fires.

The dwarfs were ugly little black men. They were not any bigger than your thumb. They had crooked backs and crooked legs. Their eyes looked like black beads.



Loki said, "Can you make me a gold crown that will grow like real hair?"

The dwarfs said, "Yes, we can." So the busy little dwarfs worked all night.

When morning came the dwarfs gave Loki his crown of golden hair. They gave him a spear and a ship, too.



Loki took the things up to Asgard, where the gods all lived.

Then the gods all came up to him. He showed them the things.

The gods said, "They are very wonderful."

And Loki said, "Oh, nobody else can make such things as my little dwarfs."

A little dwarf, named Brok, was standing near by. He heard Loki say that. Then he stepped up and said, "My brother can make just as good things as these."

Loki laughed and said, "If you can get three things as wonderful as these, I will give you my head."



Brok went down into the ground where his little dwarfs were working.

Brok's brother was named Sindre. He said to his brother, "Loki says that you can't make such nice things as his dwarfs can. He said that he would give me his head if I could get him such wonderful things as his."

This made the dwarfs angry. Their eyes grew big. They said, "He will see what we can do."

Sindre wanted to know what the wonderful things were.

Brok said, "Loki has a golden crown that will grow like real hair. A ship that can go anywhere. A spear that never misses the mark."

"We will show him," said the dwarfs.

The dwarfs soon had the fires burning. Then Sindre put a pigskin into the fire.

He gave the bellows to Brok and said, "Now blow as hard as you can."

Then Sindre went out. Brok blew and blew.

A little fly came in and bit him on the hand.

The fly bit him so hard that Brok thought he would have to stop blowing, but he did not.

Then Sindre came back. He took out a golden pig from the fire.

He next put a lump of gold into the fire.

He said to Brok, "Blow and blow and blow, and do not stop."

Then Sindre went out again.

So Brok blew as hard as he could.

Then the same fly came in and bit him again.

Brok thought that he could not stand it, but he kept on.

When Sindre came back, he took a gold ring from the fire.

Then Sindre put a lump of iron into the fire.

He said to Brok, "Now blow as hard as you can."

And Sindre went out. Brok blew and blew. The same mean fly came again, and bit him on the forehead. It bit so hard that the blood ran into his eyes.

Brok put up his hand to brush away the fly.

Just then Sindre came back.

He took the hammer out of the fire.



"There!" he said, "You have almost spoiled it. The handle is too short, but it cannot be helped now."

Brok hurried up to Asgard with his things.

All the gods came around to see. Then Loki came up to show his things.

He put the crown of gold on Sif's head and it began to grow like real hair.

He gave the spear to Odin and said, "This spear will never miss its mark."



Then he took out the ship. He said, "This is a wonderful ship. It will sail on any sea, and yet you can fold it up and put it into your pocket."

Loki felt very proud, for he thought his things were the best.

All the gods felt very sorry for little Brok. They thought Loki's things were fine. They were afraid Brok's would not be so nice.



They said, "Now, Brok, show your things."

Brok took out the gold ring. He said, "Each night this ring will throw off a ring just like it. He gave the ring to Odin."

Then Brok took out the golden pig. He said, "This pig can go anywhere, on the ground or in the air. It can go faster than any horse. If the night is dark, the shining pig will make it light."



Then Brok showed the hammer. He said, "This is not a very pretty hammer. When I was making it, Loki turned himself into a fly and made me spoil it. The fly bit me so hard that I had to stop blowing. So the handle is a little short. But it is a wonderful hammer. If you throw it at anything, it will hit the mark and come back to you."

The gods picked up the hammer and passed it around.

They said, "It will be just the things with which to keep the Frost Giants out of Asgard."

The gods said, "Brok's things are the best."

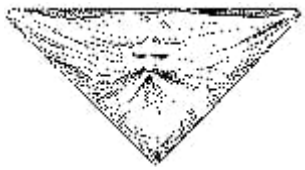
Brok gave the hammer to Thor. That is the way Thor got his wonderful hammer.

Then Brok said to Loki, "You said I could have your head if my things were the best."

And Loki was angry and said, "Yes, I told you that you could have my head. But you can't touch my neck."

Of course, Brok could not get his head without touching his neck.

So Brok did not get Loki's head.



シフは、トールのおくさんでした。

シフは、長い金色のかみをしていました。トールは、シフの金色のかみがとてもじまんでした。

トールは、いつも遠くへ旅に出かけていました。ある日、トールは出かけてしまい、シフはひとりでるすばんをしていました。シフはげんかんの前に出て、ねむってしまいました。

そこへロキがやってきました。ロキはいつもいたずらばかりしていました。

ロキは、シフがねむっているのを見ました。ロキは言いました。「あのかみを切ってやろう。」

そこでロキはげんかんに上がって、シフの金色のかみを切ってしまいました。

目がさめたシフは、かみがなくなっているのを見て、わんわんなきました。それから、走っていってかくれました。トールに見られたくなかったのです。

トールは家に帰ってきましたが、シフが見つかりませんでした。

「シフ！シフ！」とトールはよびました。「どこにいるんだい？」

でも、シフは返事をしませんでした。

トールは家じゅうをさがしまわりました。とうとう、ないているシフを見つけました。

「ああ、トール、見て。わたしのかみが、みんななくなってしまったの！だれかが切ってしまったのよ。男の人だったわ。かみを持ってにげていったの。」

トールは、かんかんにおこりました。トールは言いました。「ロキのしわざにちがいない。あいつはいつも、いたずらばかりしているんだ。つかまえたら、ただではおかないぞ！」

そしてトールは、ロキをさがしに出かけました。まもなく、トールはロキを見つけました。

トールは言いました。「シフのかみを切ったのは、おまえか？」ロキは言いました。「ああ、そうだよ。」

「それなら、わたしのつまのかみを切ったつぐないをしてもらうぞ。」とトールは言いました。

「いいとも。」とロキは言いました。「あのかみよりも、もっといいものを持ってきてやるよ。」

ロキは、地面の下へ、下へとおりていき、こびとたちの住みかへ行きました。そこは、とても暗いところでした。明かりといえば、こびとたちのたく火だけでした。

こびとたちは、色の黒い、みにくい小さな者たちでした。大きさは、あなたの親指ぐらいしかありませんでした。せなかも足も、まがっていました。目は、黒いビーズのようでした。

ロキは言いました。「本物のかみの毛のようにのびる、金のかんむりをつくってくれないか？」

こびとたちは言いました。「ああ、つくれるよ。」そこで、はたらき者の小さなこびとたちは、ひとばんじゅうはたらきました。

朝になると、こびとたちはロキに、金のかみのかんむりをわたしました。それから、やりと船もくれました。

ロキはそれらを持って、神さまたちがみんなで住んでいるアスガルドへ上っていきました。

すると、神さまたちがみんな、ロキのところへやってきました。ロキは、神さまたちに品物を見せました。

神さまたちは言いました。「これはすばらしい。」

するとロキは言いました。「ああ、わたしのこびとたちのほかに、こんなものをつくれる者はいないさ。」

そのとき、ブロックという小さなこびとが、そばに立っていました。ブロックは、ロキがそう言うのを聞きました。そこでブロックは前に出て言いました。「わたしの兄さんだって、これと同じくらいいいものをつくれるぞ。」

ロキは笑って言いました。「これと同じくらいすばらしいものを三つ持ってこられたら、わたしの頭をやろう。」

ブロックは、自分のなかまのこびとたちがはたらいている地面の下へおりていきました。

ブロックの兄さんは、シンドリという名前でした。ブロックは兄さんに言いました。「ロキが、兄さんにはロキのこびとたちのようなすてきなものはつくれないって言うんだ。ロキのと同じくらいすばらしいものを持ってこられたら、頭をくれるって言ったよ。」

これを聞いて、こびとたちはおこりました。こびとたちの目が、大きくなりました。こびとたちは言いました。「わたしたちに何ができるか、見せてやろう。」

シンドリは、そのすばらしい品物がどんなものか、知りたがりました。

ブロックは言いました。「ロキが持っているのは、本物のかみの毛のようにのびる金のかんむり。どこへでも行ける船。それから、ねらったものを決してはずさないやりさ。」

「目にもの見せてやる。」とこびとたちは言いました。

こびとたちは、すぐに火をもやしました。それからシンドリは、ブタの皮を火の中に入れました。

シンドリはブロックにふいごをわたして言いました。「さあ、力いっぱいふくんだぞ。」

そしてシンドリは出ていきました。ブロックは、ふいごをふいてふいて、ふきつづけました。

小さなハエが入ってきて、ブロックの手にかみつきました。

ハエがとても強くかんだので、ブロックはふくのをやめなければならないかと思いましたが、やめませんでした。

やがて、シンドリがもどってきました。シンドリは、火の中から金のブタを取り出しました。

次にシンドリは、金のかたまりを火の中に入れました。

シンドリはブロックに言いました。「ふいて、ふいて、ふきつづけろ。やめるんじゃないぞ。」

そして、シンドリはまた出ていきました。

そこでブロックは、力いっぱいふきました。

すると、さっきと同じハエが入ってきて、またかみつきました。

ブロックは、もうがまんできないと思いましたが、ふきつづけました。

シンドリはもどってくると、火の中から金のゆびわを取り出しました。

それからシンドリは、鉄のかたまりを火の中に入れました。

シンドリはブロックに言いました。「さあ、力いっぱいふくんだぞ。」

そしてシンドリは出ていきました。ブロックは、ふいてふいて、ふきつづけました。あのいじわるなハエが、またやってきて、こんどはブロックのおでこにかみつきました。あまり強くかんだので、血が目の中に流れこみました。

ブロックは、ハエをはらいのけようと手を上げました。

ちょうどそのとき、シンドリがもどってきました。

シンドリは、火の中からハンマーを取り出しました。

「ほら！」とシンドリは言いました。「もう少しでだめにするところだったぞ。持つところが短すぎる。でも、もうしかたがない。」

ブロックは、品物を持ってアスガルドへいそいで上っていきました。

神さまたちがみんな、見にあつまってきました。まず、ロキが自分の品物を見せに出てきました。

ロキが金のかんむりをシフの頭にのせると、それは本物のかみの毛のようにのびはじめました。

ロキはオーディンにやりをわたして言いました。「このやりは、ねらったものを決してはずしません。」

それから、ロキは船を取り出しました。ロキは言いました。「これはすばらしい船です。どんな海でもわたれるのに、たたんでポケットに入れることもできるのです。」

ロキは、自分の品物がいちばんだと思って、とてもとくいになっていました。

神さまたちはみんな、小さなブロックのことがかわいそうになりました。ロキの品物がすばらしいと思ったからです。ブロックの品物は、あれほどよくないだろうと心配したのです。

神さまたちは言いました。「さあ、ブロック、おまえの品物を見せてごらん。」

ブロックは、金のゆびわを取り出しました。ブロックは言いました。「このゆびわは、毎ばん、これとそっくりなゆびわを一つずつ生み出します。ブロックは、そのゆびわをオーディンにわたしました。」

それから、ブロックは金のブタを取り出しました。ブロックは言いました。「このブタは、地面の上でも空の上でも、どこへでも行けます。どんな馬よりも速く走れます。夜が暗ければ、このかがやくブタがあたりを明るくしてくれます。」

それから、ブロックはハンマーを見せました。ブロックは言いました。「これは、あまりきれいなハンマーではありません。わたしがこれをつくっているとき、ロキがハエに化けて、わたしにしくじらせたのです。

ハエがあまりに強くかんだので、ふくのをやめなければなりませんでした。それで、持つところが少し短いのです。でも、これはすばらしいハンマーです。何かに向かって投げれば、ねらったものに当たって、手もとにもどってくるのです。」

神さまたちはハンマーを手に取って、つぎつぎに回して見ました。

神さまたちは言いました。「これこそ、しもの大男たちをアスガルドに入れないようにするのに、ぴったりのものだ。」

神さまたちは言いました。「ブロックの品物がいちばんだ。」

ブロックは、ハンマーをトールにあげました。こうして、トールはすばらしいハンマーを手に入れたのです。

それからブロックはロキに言いました。「わたしの品物がいちばんなら、頭をくれると言ったな。」

ロキはおこって言いました。「ああ、頭をやると言ったさ。でも、わたしの首にさわってはいけないぞ。」

もちろん、首にさわらずに、頭をとることはできません。

それで、ブロックはロキの頭をもらえませんでした。

たんご と クイズ　トールがハンマーを手に入れたわけ

hair かみの毛	**dwarfs** こびと	**crown** かんむり
spear やり	**ship** 船	**fly** ハエ
ring ゆびわ	**hammer** ハンマー	

Q1 シフのかみを切ってしまったのはだれ？

① ブロック　② ロキ　③ トール

Q2 ブロックがふいごをふいているとき、じゃまをしたのは？

① 小さなハエ　② 大きなワシ　③ 金のブタ

Q3 ハンマーの持つところが短くなってしまったのはなぜ？

① 鉄が足りなかったから　② トールの手が小さいから　③ ハエにかまれてふくのをやめたから

こたえ

Q1 ②　いたずら者のロキが、ねむっているシフの金色のかみを切ってしまいました。

Q2 ①　小さなハエが何度もかみつきました。じつはそのハエは、ロキが化けたものだったのです。

Q3 ③　ハエにおでこを強くかまれて、ブロックは一度ふくのをやめてしまいました。それで持つところが短くなったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7841（E. Louise Smythe、1904年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1904 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Sarah Jennings、Abby（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。